平成30年度特別養護老人ホーム「はなの家とむろ」事業報告

福祉・介護業界は全体として人手不足が常態化し、人材の確保・育成が何よりも大きな課題となっている。現場の疲弊を少しでも減らし、利用者に皺寄せがいかないようにするためには、人材紹介や派遣職員も上手く活用していくことも必要な状況にある。そのような中、今年度の医療・介護報酬同時改定は、0.54%のプラス改定となり、年間を通して安定した収入を確保できたことは、施設にとって大きな成果であった。

今後の人の補充や研修への参加、次年度の働き方改革に伴う有給休暇の取得等職員の処遇改善、新たな人材として注目されている技能実習生の受け入れ等々、法人としての今後のあり方を考えながら運営していきたい。

平成30年度の施設目標に沿って総括および年間を通しての実績を報告する。

1. 「利用者のために」を実現しよう

① 相手の立場を考えた行動

② 「やりたい」気持ちを引き出し応える支援

看護師の人員が充実したこともあり、ユニット担当看護師を配置し、看護・介護が協働で利用者に寄り添う時間を作り、連携した支援に取り組んだ。

今年度も例年通り、夏祭り、敬老祝賀会等施設行事を滞りなく実施できた。利用者の笑顔が見られる半面、介護度の高い利用者が増加する中で参加も難しい利用者も出てきており、今後開催の仕方や内容等検討が必要である。新たな試みとして、元気な入居者には認知症カフェや地域講座など地域向けの催しにも参加してもらい、外部との交流の機会を作れたことは良かったのではと思う。

看護・介護・生活相談・通所部門で実習指導を行い、高校生のインターンシップや中学生の職場体験、医学部学生の施設体験も積極的に受け入れた。人材不足の中、一人でも施設で働くことを希望する人が増えることを願い、施設で働くことの楽しさや充実感を伝えられるよう努力した。利用者にとっても良いコミュニケーションの機会となった。

2. 組織力を強化しよう

① 双方向のコミュニケーションで組織の活性化

② 施設全体を見通す広い視野を持った人材の育成

③ 介護報酬改定への迅速な対応

10月長期的展望に立ち、看護・介護の連携の強化と職員の教育・育成を目

的に、看護師長を看護・介護部門統括とする組織変更を実施し、統括指導の下、フロアー（ユニット）リーダーが自部門の職員の状況把握やフォローを行い、安定して勤務できる体制を取ることで、定着率の向上を目指した。

近年介護事故に対する厳しい判例も増加していることから、事故指針の見直しを行い、事故のレベルに合わせた報告と再発防止策の立案と実施に取り組んだ。

介護報酬改定と同時に基準条例の改定があり、身体拘束等の適正化が厳しく求められるようになったため、身体拘束等適正化のための指針を見直し、全職員に再教育を実施した。

介護報酬改定では新たに、褥創マネジメント加算を取得し、看取り介護加算（Ⅱ）、配置医師緊急時対応加算取得のための届出を行った。また通所部門では半期の実績に基き、ＡＤＬ維持等加算が取得できることとなった。

3.　数値目標

①　稼働率　入居 97%　ショートステイ 85%　通所 65%

＜入居 98.3%＞　施設内看取り 18 名、入院後死亡 3 名、入院延 18 名、平均介護度 4.0、3 月末入居待機者 30 名（内、介護度 4・5　17 名）。昨年度より退去者が少なかった分稼働率がアップし目標達成できた。待機者増加は期待できず、日常生活継続支援加算は今後消費税増税に伴って改定される「介護職員等特定処遇改善加算」の取得要件となるため確実な取得が必要である。

＜ショートステイ 64.3%＞　施設内看取り 1 名、平均介護度　3.2
ミドルステや緊急の受入れも積極的に行ったが、昨年同様稼働率は目標値に届かなかった。稼働率アップには今後どのような対策が立てられるか早急に検討していきたい。

＜通所 73.9%＞　1 ヶ月平均 380 回（予防含む）、平均介護度　2.6
今年度は季節に関係なく年間を通して目標の稼働率を維持できたため、収入も通所部門単独で黒字化、昨年度の約 35%増の収入となり、ショートステイが低迷する中、今年度は通所が大きく貢献する結果となった。

②　成果発表会　年 1 回

第 3 回目の成果発表会を実施し、昨年同様 8 演題の発表を行い、3 演題を優秀賞とした。2 演題を 7 月開催の神奈川高齢者福祉研究大会で、残りを 10 月開催の全国ユニット型施設推進協議会全国大会（横浜）で、外部発表を予定している。

③　外部発表　2 演題

昨年度の優秀賞 1 題を昨年 11 月開催の全国ユニット型施設推進協議会全国大会（沖縄）で発表を行った。精神的に不安定な利用者に深く関わった事例に対して高評価をいただいた。目標の 2 演題の発表には

至らなかったが、次年度には3演題実施していきたい。

④　家族交流会　年１回

今回はハーモニカのボランティアグループの演奏と認知症予防に役立つコグニサイズを取り入れ6月に開催した。介護度が高くなり、入居期間も短縮する傾向もあり、施設開設当初のような関係づくりも難しくなってきているため、年々参加者が減少している。今後のあり方を見直す時期になったように感じている。

⑤　ボランティア交流会　年１回

利用者の食事を味わい知っていただくこと、日頃の活動を労い感謝の気持ちをお伝えすることを目的に、ランチミーティング形式で行った。食事の評判も良く、施設理解の一翼となったと思われる。

⑥　認知症カフェ　月１回

今年度も月１回定期的に実施できた。看護部を中心に、コグニサイズを実践できる職員を増やし、今後も継続して開催できる体制作りに取り組んだ。

⑦　地域講座　年１回

近年口腔ケアの重要性が高まっていることから、「口の健康は体の健康」と題して、歯科医師による健康講座を実施した。次年度以降もテーマを決め継続して行っていく予定である。

また、当初予定はしていなかったが、地域のケアマネジャーに対して5月・10月にケアマネ見学会を行い、施設を知ってもらい身近に利用してもらえるような機会を作ることができた。利用者の新規紹介に繋がっていると思われる。

特別養護老人ホーム全体としての財政状況が厳しい中、法人として平成30年度は基本報酬 0.54％のプラス改定の効果で、開設以来始めて総収入が60,000万円を超え、収支増減差額率も9%を確保することができた。今後は修繕費等が増加していく可能性が大きくなるため、経費節減に努めると同時に、10月以降の消費税アップに伴う報酬改定にも迅速に対応していく。